

主に結ばれた死の幸い

ヨハネの黙示録一四章一〜13節

「書き記せ。『今から後、主にあって死ぬ人は幸いである。』」
霊も言う。「然り。彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。その行いが報われるからである。」(13)

この黙示録は、殉教の危険に絶えずさらされていた主の弟子たちの群れに宛て書かれた牧会者の手紙です。その牧会の言葉の頂点がここにあると言われる言葉がここに出てきます。「今から後、主にあって死ぬ人は幸いである」。黙示録はこのことを語りたいために書かれた書物であるとさえ言われます。どんな人も、最後には死を迎えます。そのとき、信仰を持たない人にとって、死は無に帰することです。けれども、キリストを信じて死ぬ者はそうではありません。死は無でも絶望でもなく、幸いであると言われます。ついに地上の労苦が終わり、私たちの真の父である神のもとに帰り、憩いを得るからです。どのような死を迎えるかは、今をどう生きるかということと深くつながっています。この地上にあって、生ける主に結ばれて生きる者たちは幸いであるとヨハネは語るのです。